

---

# とある作者の妄想世界

椿牡丹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある作者の妄想世界

### 【Nコード】

N3993BA

### 【作者名】

椿牡丹

### 【あらすじ】

短い話を色々書いていきたいと思えます。もしかしたら長いものも書くかもしれませんが、ネタ次第です。時間軸はもちろん、作品もバラバラです。

この小説は作者の妄想が詰め込まれています。そのためキャラの口調、性格などおかしくなっている場面が多々あります。

キャラ崩壊を起こしても書きたいものを書きます。

原作ブレイクが激しいです。

リクエストはいつでも募集しています。

この小説は百合50% 恋愛10% 変態40%で構成されています。

フェイト・T・ハラオウンの場合（前書き）

すみません。変なノリの時に書きました。

需要は……あってくれると嬉しいです。

いつも以上に変な時に書いたので、いつの以上にエロくなっています（笑）

## フェイト・T・ハラオウンの場合

「フェイトちゃん」

声が聞こえる。

私を救ってくれた人の声。

私の大好きな人の声。

そして 私を大好きでいてくれる人の声。

「フェイトちゃん」

何度も何度も言ってくれる。

あの日した約束。たったそれだけで友達になれる魔法の言葉。優しく微笑みながら、優しい声で私に言ってくれる。

「大好きだよ、フェイトちゃん」

「私もだよ。なのは」

お互いに笑いあって。見つめあって。唇を重ねる。触れるだけの優しいキス。

それだけで私の中になのが入ってくるような気がする。なのはで満たされている感覚が私を幸せにしてくれる。

なのは。

最愛の人の名前。

何をしてでも守りたい人の名前。

何よりも大切な人の名前。

手を重ねて、唇を重ねて、体を重ねる。

ああ、私は今幸せなんだ。そう実感できる。

「なのは」

「フェイトちゃん」

名前を呼び合いながら、もう一度。

今度は触れるだけじゃなくお互いをより感じ合ったためのキス。

深く、深く、絡み合う。苦しくなると一旦離れる。でもその苦しさは嫌な苦しさじゃなくて、むしろその苦しさが幸せの結晶だから。

離れて、また繋がって。お互いがお互いを求め合う。

長い時間そうしていると時間の感覚がなくなっていく。

今が何時なのか、何時間そうしているのか、分からなくなってしまふ。でも、元々知りたいたとも思っていないから別にいい。

なのはが隣にいてくれる。同じ時間を共有できる。

なのはも同じことを思ってくれてると嬉しいな、なんて思うのは私の我が儘かな……。

少しくらいならいいよね？

「なのは」

「んっ……」

漏れる声も、乱れる髪も、表情も、なのはの全てが愛しい。

こうやって主導権を握るのは好き。

なのはの事、全部見れるから。全部感じれるから。

「まあ、フェイトちゃん」

「なの、は？」

体が入れ替わる。たったそれだけの事で世界の見え方が全然違つて見える。

見上げるなのははとっても力強くて。その目に、言葉に、行為に、抗うことができない。

私の両腕を押さえて動けなくする。

動けない私の体をなのははじっくりと味わっていく。始めは優しく。段々と激しさを増して。

両腕を押さえているから、なのはも空いている手がない。だから必然的に舌が主に動く。

上から下へ。下から上へ。焦らすようにその場で。

「あつ……んんっ……」

舌が這つたところが熱い。熱を持っているのが分かる。声が漏れなように堪えても、勝手に出てきてしまう。

恥ずかしいよ……。

「我慢しなくていいんだよ？」

「んっ……ダメ……恥ずかしいよ……」

「恥ずかしくなんかないよ。フェイトちゃんの声、もっと私に聞かせて？」

「なのは……ダメ……」

熱い。頭がポーツとしてる。視界がなのはで埋め尽くされている。ありのままの私を見られているのに恥ずかしいなんて今更だと思っけど、やっぱり恥ずかしい。

声を聞かれてるだけなのに。

「……なのは……」

なのはが私の呼び声に反応してくれる。

でもその目はどこか強気な目で。表情もどこか意地悪に感じる。

「あっ……ダメ、もう……」

頭が真っ白になる。

頭の奥で何かが弾けそうになっている。なのはの舌が、指が、私の中をかき乱していく。

でも。

「え……なんで……」

突然止められた行為に私は思わず聞いてしまう。そしてなのはの顔を見る。

この表情を知っている。なのはがこの表情をする時はいつも決まっ  
て意地悪だから。

でも、だからって。



「なのは……」

「フェイトちゃん、えっちな子なんだね」

「えっ……?」

「私ね、えっちな子は嫌いなの」

はつきりと言うのは。

その言葉に胸が締め付けられる。なんでそんなことを言うの? 私を嫌いにならないで。

そう言いたいけど、口が動かない。体が強張るばかりで、そのせいか考えもまとまらない。

「えっちな子にはお仕置きをしなきゃ」

「お仕置き……」

「そうだよ。お仕置き。えっちなフェイトちゃんを私がお仕置きしてあげる」

そう言っつて私の首筋に舌を這わせる。

そこから感じる熱と痺れから、また声が漏れる。

その声なのはに届いてしまう。

「あれ? フェイトちゃん、えっちな子なの? 私、えっちな子は

嫌いだよ?」

「うう………私はえ、えっちな子じゃないよ」

「……フェイトちゃんはずるいよ」

小さく呟いたなのはの言葉。

言葉を返したかったけど、出来なかった。

あの約束　　また会おうと約束して、約束を果たして、もう十年が過ぎた。

あっという間の十年だったと、本当にそう思う。今までの出来事は、会った人は、みんな覚えている。

なのはと出会って、母さんと離れて、新しい家族ができて、新しい友達ができて、共に戦う仲間ができて。

そして、新しい居場所ができた。

悲しいことも沢山あった。ううん。『あった』なんて過去の事にはできない。

私の心には今でも残っている。

母さんにいらないと言われた時の事が。

母さんが離れていく時の事が。

目を閉じて少し考えただけで、すぐに蘇ってくる。

「フエイトちゃん」

それでも私が前を向いて歩いていけるのは、なのはがずっと隣にいてくれたから。

私が挫けそうな時も、泣きたくなくなる時も、泣いちゃってる時もずっと変わらずに私の隣にいてくれるから。

私の大好きなのはが隣にいてくれる。

それだけで私は頑張ることができた。

私はPT事件 プレシア・テストロツサ事件の実行犯だ。『言いなりになっていた』や『母親の言うことを聞いていただけ』と庇ってくれた人達が沢山いた。

でも、そうじゃない。

私のしてきたことは悪いことで、犯した罪は決してなくなりはない。

今はそれを実感として理解できる。

「なのは、ありがとう」

「フェイトちゃん？」

「何でもない」

だから私はその罪をちゃんと償っていきこうと思う。

一生を懸けて、命を懸けて、誰に頼ることもなく、自分の力で。

こんな事、なのはには言えない。言ったらたぶん怒られちゃうから。

『フェイトちゃんは一人じゃないんだよ』って。

「フェイトちゃんは一人じゃないんだよ」

「なのは……」

……なのはには敵わないな。私の考えてることを、隠そうとしていることをいつも言われちゃう。勘付かれちゃう。隠しておきたい事にはそれなりの理由があるのに。

「だから、ね？」

そうやって私を見るなのはの表情に、私は何も言えなくなってしま

そんな顔されたら、余計に言えないよ……。

心配してくれるのはとても嬉しい。私が考えてることを分かっててあえて何も言わず、私から言ってほしいって思ってくれてるその姿勢も。

でも。

「なのは」

「何？ フェイトちゃ」

なのはが話し終える前にその口を塞いでしまう。

これだけは譲れない。譲っちゃいけない。

『私たちはまだ始まってもないんだ』

『本当の私たちを始めよう』

そう言ってくれたのはだから。

だからこれは私の罪。そして罰。

「私はフェイトちゃんの隣にいるよ」

「えっ？」

「ずっと。いつまでも。おばあちゃんになっても。フェイトちゃんをお嫁にいかせたりしないんだから。そんな事をする人には全力全開で砲撃しちゃうよ。ね、レイジングハート」

《Yes, my master》

どうだろう。あれを受けちゃった人はなのはの事を好きになっちゃ

うからなあ。

私としては微妙な気持ちだ。でもなのはは無自覚なんだよね。そんななのはが私は大好きなんだけど、なのはを狙う人が増えるのは嫌だ。

「よろしくね」

「任せて!!」

私はここにいる。この居場所にいつまでも。

人間だからいつかは死んじゃう。もしかしたら、もうすぐかもしれない。私が目指している仕事は、そういう仕事だ。

死に方だっけきつと選べない。なのはの傍で逝くことはできないと思う。

それはなのはも分かってる。分かってくれている。だから私はここにいる。

なのはの元に帰ってくるために。

なのはの帰ってくるようになるために。

## フェイト・T・ハラオウンの場合（後書き）

はい、なのはとフェイトでした。

相変わらずな下手くそですね。フェイトちゃんの一人語りですけど、基本的にお互い名前しか言っていないませんし。こんな小説を書いたのは初めてです。

書いてる時からテンションがおかしかったので薄々そんな感じになる気はしていました。

とはいえ、書いていて楽しかったことに変わりはありません。読み直して見ると……ノクターンくらっちゃうかも。

そんな心配もしていますが、くらった時は報告します。笑ってください。

とか言いながら何のオチもないのが私なので、案外大丈夫かもしれませんか。R-15にはしてますし。

18歳ならもつと濃いのを読んでいますよね？ 私はそう信じています。

だから通報とかしないでください（笑）

結構行き当たりばったりな私の小説ですが、次回の話は既に決まっています。

霸王です。

そう、アインハルトさんです。

あの謙虚さ、どれだけ私が書けるかは分かりませんが頑張りたと思います。

よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3993ba/>

---

とある作者の妄想世界

2012年1月11日01時02分発行